

# 平

成二十六年八月二十日未明、広島市内は局地的に時間一〇〇ミリの豪雨となった。このため、広島市安佐南区と安佐北区では、午前三時から午前四時にかけて土石流とがけ崩れが同時多発的に発生し、死者七四名という甚大な被害が発生した。

(公社)土木学会と(公社)地盤工学会は災害発災後直ちに合同緊急調査団を組織して調査を開始した。筆者も調査団に加わり、被災地区の調査や、源頭部まで登って溪流の調査などを行った。緊急調査団が調査検討した結果、被害が大きかったいくつかの溪流では土石流は複数回発生し、先発の土石流の影響で後発の土石流が流路を変えて住宅密集地を直撃したことや、多くの溪流で事前に想定されていた土砂量を実際に発生した土砂量が上回っており、実際に発生した土砂量が想定の上と推定された場所があったことが判明した。このような調査結果は調査団の報告書にまとめられている。

調査を行っていく過程で、以上のような技術的な事項以外に、筆者は多くのことを考えさせられた。

例えば、安佐南区で土石流が多数発生した山の名前は阿武山であるが、災害後に市民から筆者に次のような内容の電話があった。「阿武山には大蛇がおるんじやー。阿武山の頂上には大蛇を祀っている神社がある。阿武山の大きな崩れを『ジャヌケ』と言うとった。阿武山は昔か

## 各 人 各 説

# 土砂災害調査団に参加して

広島工業大学工学部環境土木工学科 教授

## 熊本直樹

Naoki Kumamoto



らよく崩れるとこじゃった」。調べてみたら確かに大蛇伝説の神社が山頂にあった。このような土石流発生地域に住宅地が発達するというま

ちづくりのあり方について考えさせられた。復旧の過程についても考えさせられた。被災地を回っていると土石流で流されて壊れた自動車

車が放置されていた。個人の財産だから行政は無断で処分できないそう。また、床上高く土砂や玉石が堆積している家があり、老人が途方

に暮れて「年寄りだからどうにもなりません」と語っていた。個人の家屋内の土砂は個人が除

去するのが原則とのことで、その後ボランティアの方が入って整理した。

このような広島災害の復旧の過程で筆者が注目したひとつに、建設業者の活躍がある。行政

やボランティアの方々も活躍されたが、土砂や瓦礫を最終的に運び出してまちの復旧に大いに

貢献したのは建設業者であった。

災害が発生したときに地域の建設業者が重機を持ってきてライフレインの確保に貢献した例

は多い。自然災害から地域を守るためには地域に根ざした優秀な建設会社の存在が不可欠であ

る。人は霞を食って生きているのではない。過疎化や都市への投資の集中で地域の建設業界が

衰退するのではないかと筆者は心配している。災害支援の一翼を担っている建設業界が衰退す

ることのないよう、行政、業界、そして地域が知恵を出し合っていく必要がある。